

研究報告)

現代の白無垢姿における「帯結び・文庫」に関する一考察

A study on the evolution of "obi tying・Bunko"
in modern white wedding kimono

青木和子 佐藤美奈子 山野愛子ジェーン

抄録

本研究報告は、日本の現代婚礼において一般的に用いられている白無垢の帯結びに注目し、江戸時代から現代に至る流れを整理することを目的とする。江戸時代の武家女性装束および町人女性装束に関する図像資料を整理し、帯の扱われ方を比較した。その結果、武家装束において帯は衣服を固定する機能的要素として位置づけられ、視覚的要素として強調されていなかった。一方、町人文化の成熟とともに、文庫帯結びに代表される造形的な帯結びが発達し、帯は後ろ姿を構成する重要な意匠要素として展開していったことが確認された。

これは、現代白無垢に見られる帯結びでは、文庫結びが「武家」の流れとして定型化しているが、その表象は歴史的女性装束とは必ずしも一致しないことを示す。本稿ではこれら異なる系譜をふまつつ、図像資料の検討に加え、帯結びに関する実践的な試行を行い、現代白無垢における帯結びの理解の検討を試みる。

キーワード：和装花嫁、白無垢、帯結び、文庫結び、江戸時代、婚礼衣装

I. はじめに

現代の婚礼において「白無垢」は、日本の伝統的な花嫁衣裳として広く認識されている。その由来については「武家婚礼装束を起源とする」という説明が一般的であるが、具体的な装束構成、とりわけ帯結びの扱いについては十分に検討されてきたとはいえない。現代の婚礼衣装における帯結びは、掛下帯で文庫結びを結び、後ろ姿に帯結びが明確に視認される。一方、江戸時代の武家女性装束において、帯は必ずしも造形的要素として前景化されていなかったと考えられる。

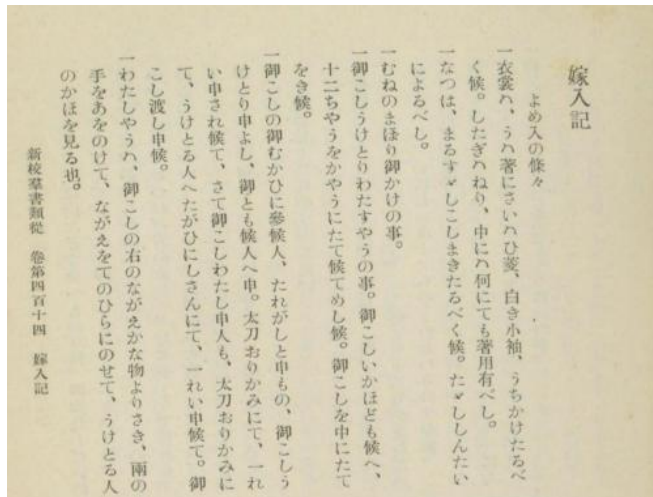
本報告では、白無垢における帯結びについて、江戸時代の武家装束と町人文化における文庫結びの成立、そして現代婚礼における定型化という視点から整理する。さらに、文献、図像資料に基づく実践的試行を通じて、帯結びの可視性に関する理解を補足的に検討し、現代的表現との関係性について基礎的な考察を行う。

II. 江戸時代武家装束における帯の位置づけ

武家の婚礼衣装を記述している文献はほとんど見られないが、江戸時代の武家女性装束は、身分秩序や令制と密接に結びついて構成されていたことが確認できる。古書『婚礼法式』¹ (1765) によると、身分や武家礼法によって多少の違いはあるものの、婿と嫁の衣裳の記述が残されている。長崎巖氏の著書『日本の婚礼衣装：寿ぎのきもの』にも、江戸時代の婚礼に関わる故実は、基本的には室町時代に確立されたそれを受け継いでいると考えられる、とある。武家婚礼における白装束は、打掛・小袖・掛下・被衣²などの複数の衣服の重なりによって構成されている。室町時代の書『嫁入り記』によると、地紋を織り表した白い小袖を打ちかけて着用し、その下は練絹の小袖を着用と記されており、嫁の衣裳は、適当な肌着を着た上に、白の小袖に帯を締め、さらに地紋入りの白の小袖を着ていたようである。衣裳全体を白地で統一しているいわゆる「白無垢」は、室町から江戸に継承されていることがうかがえる。

¹ 『婚礼法式』伊勢貞丈著。江戸時代・明和2年(1765)成立

² 被衣 かづき、きぬかずきともいう。平安時代以降、公家や武家の女性が外出時に頭からかぶって用いた単(ひとえ)。『コトバンク』[ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典] (2026-1-17)



塙保己一 編『新校群書類従』第18巻(武家部(二)・积家部(一)),
内外書籍,昭7.「嫁入記」
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1171411> (参照 2026-1-17)

嫁入記

よめ入の條々

- 一 衣裳ハ、うハ著にさいハひ菱、白き小袖、うちかけたるべく候。したぎハねり、中にハ何にても著用有べし。
- 一 なつは、まるすゞしこしまきたるべく候。たゞしんたいによるべし。
- 一 むねのまぼり御かけの事。



「打掛 白地浮織幸菱模様」

江戸時代・19世紀

浮織物(絹)

所蔵: 東京国立博物館

国立文化財機構所蔵品統合検索システム

(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/I-1402)

武家女性の後ろ姿において、背面からの帯結びの形状が明確に描写されている例は非常に少なく、図像資料に見られるように、打掛の下に結ばれているので帯型は見えない。



浮世絵「三定例之内、婚礼之図」歌川国芳

所蔵 東京都立中央図書館

<https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/detail?tilcod=0000000003-00219514>

(参照 2026-1-17)

上: 全体 下: 部分拡大



106 江戸末期の城内大奥の御殿女中打掛け姿である

打掛姿

井筒雅風 著『原色日本服飾史』, 光琳社出版, 1982.7

国立国会図書館デジタルコレク

ション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/12169204>

帯の扱いについては、多くの古書や文献にみられる通り、小袖を押さえる帯紐とされ、前から脇へ、さらに後ろなどで結ばれてきた。

『日本衣服文化史要説』には、江戸初期にかけて唐織、厚地、ビロードなどが使用され、自然に結び目が肥大化することになったと記述されているが、武家装束において帯は、視覚的な装飾対象というよりも、着装を内側から支える役割として扱われていた可能性が高い。

婚礼装束では、表衣である打掛が造形的・象徴的役割を担い、帯は外観上ほとんど認識されない存在であったため、衣を固定するための実用的要素として機能していたのではないだろうか。

このような帯の扱いは、装束全体の象徴性が色や重なり、素材にゆだねられていた武家婚礼の特性を反映するものであり、この点は後世における「帯を見せる」という着装観とは大きく異なる。

III. 町人文化における文庫結びの展開

一方、江戸中期以降にかけて、町人文化の成熟と共に女性の装束においては帯の幅は次第に拡大し、後ろ姿を意識した帯結びが造形的に展開していった。文庫結びはその代表例で、結び自体が意匠として完結していると言える。帯を背面で大きく結ぶことにより、町人文化における帯結びは、装身具としての視覚的効果を重視し、個人の美意識や流行と密接に結びついていった点に特徴がある。

特に、延宝・天和期に、歌舞伎役者（女形）の上村吉弥³が舞台で結んだ『吉弥結び』は、最初に優雅で装飾性に富んだ帯結びの形を備えたものとして史的意義は極めて大きいとされている。

そして次に元禄期（1688～1740）の名女形、水木辰之助⁴が結んだ『水木結び』は、吉弥結びの両端をより長く垂れ下げた形で、これは外観上の特徴において次の『だらり結び』の先駆的存在である。



『近世女風俗考』より p43 「吉弥結び」
生川春明 編『近世女風俗考』, 東陽堂, 明 28.7.
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/767874> (参照 2026-1-17)



「見返り美人図」 菱川師宣筆 東京国立博物館



『守貞謄稿圖版集成 上』より p75 「だらり結び」

³ 上村吉弥初代（1673～81）は延宝、江戸時代前期の京都の女方歌舞伎役者 『コトバンク』 [デジタル版 日本人名大辞典+Plus] (2026-1-17)

⁴ 水木辰之助初代（1673～1745）は元禄時代を代表する女方の歌舞伎俳優：文化デジタルライブラリー <https://www2.ntj.go.jp>

この『守貞謾稿』⁵によると、「此帯のむすびやう、水木結也。今は文庫結と云。中昔、むすびさげと云も、是なるべし」とある。

また、大槻如電の『江戸服飾史談』にも江戸中期・元禄時代に上方役者の水木辰之助より取りつかれた伝染病で女の風俗が一変したと記され、階級を問わず、振袖が2尺になったこと、後ろ結びのだらり結びの一変を示し、その節には、「結び目が庇のようになっております。その形から文庫結びなどとも唱えるそうです」と記されている。



鈴木春信 画『風俗四季哥仙 竹間鶯』

このように、図像資料においても、文庫結びが明確な形状をもって描写されており、帯が装いの中心的要素の一つとして機能していたことがうかがえる。このような町人文化における「見せる帯」の発展は、武家装束における帯の「みせない」位置づけとは対照的で、町人文化の装いの価値観を反映していると言える。

IV. 現代白無垢における帯結び表現

現代の婚礼において着用される白無垢では、掛下⁶と呼ばれる帯を用いた「文庫結び」が標準的な帯結びとして採用されている。多くの場合、その上着として打掛をかけることが一般的だが、掛下と掛下帯

の文庫結びの立ち姿で花嫁技術の品質を精査する大会（花嫁技術コンテスト等）も実施されている。すなわち、現代においては白無垢の帯結び（文庫）は後ろ姿の主要な視覚的要素となり、写真撮影や儀礼演出において重要な役割を果たしている。

また、現代白無垢がしばしば「武家風」や「格式高い」と説明されるが、それは白色や打掛の形式に由来するものであり、帯結びに関しては、必ずしも武家婚礼装束の実践を直接的に踏襲しているとはいえない。これについては、帯結びの可視化、「見せる帯」という観点から考察する限りは、江戸時代武家婚礼における帯の扱いとは異なることが確認され、一方で、町人文化において発達した造形結びの系譜と連続する側面を有していると考えられる。現代白無垢における帯結びは、後ろ姿の完成度を重視する視覚文化の影響を受け、「見せる帯」として再編成されたものであると考えられ、町人文化以降に形成された帯結び観を内包しているという理解が可能である。



現代の典型的な文庫結び

V. 「見せない帯結び」と「見せる帯結び」の実践的検討

はじめに、文献および図像資料に基づき、江戸時代の帯の位置づけについて実践的な試行を試みた。帯の寸法は江戸後期の記述を参考し、背面に造形的な結び目を形成しない方法を『御殿女中』三田村鳶

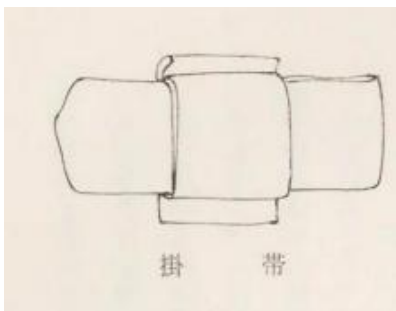
⁵ 守貞謾稿（もりさだまんこう）は、江戸時代後期の三都（京都・大阪・江戸）の風俗、事物を説明した類書。『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/守貞謾稿> (2026-1-17)

⁶ 掛下（かけした）は、江戸時代に武家の女性が打掛の下に着た小袖を指し、今日では花嫁衣装にそのなごりをとどめ、掛下（かけした）と呼ばれる。『コトバンク』〔世界大百科事典(旧版)〕(2026-1-17)

魚著を元に再現試行した。

その結果、打掛を着装した状態では、前述の通り背面から帯結びの形状を視認することが困難であり、また、帯は外見から現代のような凹凸は見当たらず、ほとんど意識されない状態であったと考えられる。この点は、武家女性装束における帯の不可視性を示唆するものであり、図像資料の解釈を補足する結果であったと考えられる。

ただし、本試行は歴史装束の再現を目的とするものではなく、限定的条件下での検討である。



三田村鳶魚 著『御殿女中』, 青蛙房, 1964
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/9544638> (参照 2026-1-17)



『御殿女中』イラストを再現した写真

一方、町人女性の文庫結びは江戸時代の資料で確認できたが、現在の文庫結びが花嫁衣裳の掛下帯の結び方に近づくのは、大正時代の資料で確認できる。その資料を参考に再現試行した。



山崎清吉, 山崎信子 著『婚礼美装術：附・女帯結び方説明』
東京婦人高等美髪学会出版部, 大正 8.
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/961978> (参照 2026-1-17)



『婚礼美装術：附・女帯結び方説明』
イラストを再現した写真

本章で述べている通りに実践してみたところ、前出の帯についてはいずれも現在の造形に類似していることがわかった。

構造という点では、当時と現代における帯地の質感や幅、縫製などが明らかに異なっていること、現代では象徴的造形は人の手に委ねられている（他装）ことにより、結びのプロセス（手順）は異なると予測できる。ただ、造形としての型は、「文庫結び」が江戸からその後にも多くの造形を生み出すきっかけとなっていることが感じられる。例えば、

現代に浴衣帯で最もポピュラーとされている「一文字」「リボン結び」や、名古屋帯使用での「一重太鼓」などのルーツも見え隠れする。

こうした実践は、文献などから検討する時代考証だけでは得られない、人々の「手」そのものを感じて再現できる貴重な検証になると実感することが出来た。

VI. 結果と考察

本研究報告では、白無垢における帯結びの変遷について、江戸時代の武家装束および町人文化との比較を通して整理を行った。

その結果、武家装束において帯は視覚的に抑制されていた一方、町人文化では帯結びが造形的表現として展開していったことが確認された。

現代白無垢に見られる帯結びは、これら異なる系譜を踏まえつつ形成されたものであり、単に武家婚礼装束の継承にとらえることはできない。本報告は、白無垢の帯結びに関する基礎的整理を目的としたものであり、今後は文献資料の精査や地域差を含めた検討が課題として挙げられる。

また、今回載せた『吉弥結び』は、最初に優雅で装飾性に富んだ帯結びの形を備えたものとして史的意義は極めて大きいにもかかわらず、その帯型は確定した形がない状態である。この研究も続けたいと考えている。

利益相反の有無

なし

参考文献

図書

- 『日本の帯』紫紅会編（1999）淡交会
- 『日本の婚礼』井上章一（1991）講談社学術文庫
- 『帯の文化史』長崎巖（2001）淡交会
- 『江戸時代女性服飾史』高橋雅子（1995）東京島出版
- 『日本服飾史』増田美子（2008）吉川弘文館
- 『婚礼衣装の文化史』大藤ゆき（2003）榊雄山閣
- 『日本衣服文化史要説』山名邦和（2000）関西衣生活研究会
- 『江戸服飾史談』大槻如電 吉田豊編注（2024）筑摩書房
- 『近世女風俗考』生川正香 塚原鉄雄解説（1983）和泉書院
- 『御殿女中・鳶魚江戸文庫 17』三田村鳶魚 朝倉治彦編（1998）中公文庫
- 『服飾の歴史』高田倭男（1995）中央公論社
- 『日本の婚礼衣装』長崎巖（2021）東京美術
- 『守貞謄稿圖版集成上』高橋雅夫（2012）雄山閣

図版・資料

- 『江戸の装い』東京国立博物館編（2004）東京国立博物館
- 『日本の婚礼衣装』京都服飾文化財団編（2012）京都服飾文化研究財団
- 『日本の婚礼衣装』長崎巖（2021）東京美術
- 『きものの不思議』長崎巖（2025）東京美術